

AFC フォーラム Forum

Agriculture, Forestry, Fisheries, Food Business and Consumers

2

2019

特集 Next! 森林経営の将来像



特集

Next! 森林経営の将来像

3 森林経営管理法にみる林業経営の行方

岡田 秀二

低炭素循環型社会へ向けて「新たな森林管理システム」の実現が切要だ。実現への課題は何か、先進事例から探ってみよう

7 森林組合が主導する森林管理システム

坪野 克彦

「新たな森林管理システム」をチャンスと捉え森林整備を進めるべきだ。地域森林管理の担い手である森林組合の活動に注目した

11 高性能林業機械を駆使する効率化経営

赤堀 楠雄

政府は、高性能林業機械の導入に力を入れている。そこで経営理念に合わせ高性能林業機械を活用する事例を紹介。現場のヒントになる

情報戦略レポート

15 農業参入は増加も関心を持つ層は減少 電子商取引は拡大予想大規模企業ほど物流に課題

—食品産業動向調査(2018年7月調査)—

経営紹介

経営紹介

23 株式会社ハルキ／北海道 春木 芳則

地域材(道産材)の原木購入から各種加工、販売の一貫体制を敷く。アイデア豊かなオリジナル商品と木育で道産材の可能性を高める

変革は人にあり

27 有限会社金子ファーム／青森県 金子 春雄

制約もあり実現は簡単ではないとされる酪肉複合経営でメガファームを運営。ICTを活用した牛群管理を実践するなど科学的に農業に取り組んでいる



撮影:川隅 功
長野県岡谷市
2013年厳冬撮影

霧氷林

■葉を落としたカラマツが全面霧氷林と化す。巡り来る春まで静かに眠りにつく■

シリーズ・その他

観天望気

森を作る国造り 椎野 潤 2

農と食の邂逅

西岡 智子／栃木県
青山 浩子(文) 河野 千年(撮影) 19

フォーラムエッセイ

とろろは家族の味 鈴木 ちなみ 22

主張・多論百出

NPO法人グリーンウッド自然体験教育センター
辻 英之 25

耳よりな話 202回

施肥量激減の技術 吉岡 宏 30

まちづくりむらづくり

移住者だから分かる島の魅力発信
暮らしと観光客をつなぎ活性化へ
いえしまコンシェルジュ合同会社／兵庫県姫路市
中西 和也 31

書評

藤山 浩 編著
『「循環型経済」をつくる 図解でわかる田園回帰1%戦略』
村田 泰夫 34

インフォメーション

Vietnam Food Expo現地レポート
魅力的な市場に国際競争激化の予兆 情報企画部 35
山口県産品の商談会で地域の連携深める 山口支店 36
地域が抱える課題の答えは現場にあり 京都支店 36
交叉点 APRACA・研修団受け入れと理事会開催
情報企画部 36

みんなの広場・編集後記 37

ご案内

第12回アグリフードEXPO大阪2019 38

3月号予告

特集は「アグリデータ新時代」を予定。
デジタル化、ICT化のトレンドの下、ビッグデータの活用により、農業の生産性をどこまで向上させることができるのか。最新の取り組みを追うとともに新しい農業のカタチを展望する。

望天 観気

森を作る国造り

日本の国土は、七〇%を森林が占めています。今、その森は、戦後、官民を挙げての植林で育てた木に、満ちあふれています。太陽光線は、一年間に一億立方メートル、木を太らせてくれています。これはすごい天の恵みです。人口減少が進み家の新築の必要もなくなり、木材消費ゼロでも我慢できる時が来ると、年間一億立方メートルの木を、世界の人々に、プレゼントできるのです。日本は、世界の大国の中で、唯一、武器を持たない国です。世界は平和でしたが、将来、大きな衝突があるかもしれません。そのとき、日本が自国を守るには、世界の圧倒的多数の人たちの愛の力に頼るしかないのです。プレゼントは、そのための環境づくりです。予兆が出てきました。長年月をかけてつくり上げた、国々が協調して成長し続ける世界が、揺らぎ始めています。

春夏秋冬の四季が穏やかに移りゆく気候は、日本と日本人の宝です。これも森がもたらしてくるものです。でも、近年、気候は変調です。この地球の病を癒やすには、適切な伐採を行い、木の元気を復活させることが重要です。でも、それには山村に、必要な人をおくことが前提です。山村振興が急務です。

一層、緑豊かな国にするために、もつと木を植えましょう。近年、出てきた空家、耕作放棄地に、木はまだたくさん植えられます。田園地帯に点在する小さな森、五〇年後の日本の風景を思い描いて木を植えるのです。世界の人々に愛されるためには、山村に来てもらわねばなりません。世界に「真面目」で「誠実」な日本人の「愛情豊かな」社会。このコミュニティを包み込む「山村の風景」。世界の人々に理想郷と感じて訪ねてもらうことが、日本社会の永続の鍵です。

地球の病で、台風、大雨は、今後、一層多くなりそうです。災害防止のために森は著しく重要です。世界一、頑丈な森づくりを目指して研究し、実現していかねばなりません。

激烈に進化するAI、IoTを使った第四次産業革命。日本は、先端に立ち続けねばなりません。激烈な競争社会を闘う企業などにとっても、支えてくれる豊かな山村は極めて重要なのです。

椎野ロジスティック研究所 所長

椎野 潤

しいの じゅん

1936年東京都生まれ。早稲田大学大学院アジア太平洋研究科(MBA)教授、早稲田大学建築市場研究会主宰、NPO法人「建築市場研究会」理事長、早稲田大学建設ロジスティクス研究会主宰などを経て、現在、椎野ロジスティクス研究所所長、椎野塾塾長、工学博士。日本のロジスティクス研究のフロンティアであり第一人者として活躍。著書に「椎野先生の「林業ロジスティクスセミナー」(全国林業改良普及協会)ほか多数。



田んぼの存在は、
米をつくるだけじゃなく
可能性を無限に広げる。
だから私は、田んぼを
離れられないです。

農と食
の邂逅

西岡智子 さん

栃木県大田原市
momo farm 代表

昔から米作りは「八十八」手間がかかると言われ、そこから集落には、お互いを助け合う相互扶助の共同心が育まれてきた。女性稲作経営者が、人と田んぼを近づけ、消えかけている田んぼの仕事に新たな可能性を切り拓く。





P19:広い空の下に広がる水田に立つ智子さん。栃木県の農業女子プロジェクトにも参画している P20:福島県から移住してきた男性とともに、雑木林の下草刈りの合間にほっとひと息(右上) 妹の優子さんが営む洋菓子店は大田原市の中心街にある(右下右) すき込みをする直前の田んぼにて。「二番穂を使って、お正月向けのお飾りができるかも」とアイデアを凝らす智子さん(右下左) 趣のある蔵を活かした観光プログラムを構想中(左)

父の跡を継いで就農

稲作農家はあまたいるが、西岡智子さん(四三歳)ほど「田んぼ愛」が深い人はそうはいない。子どもの頃から、水田を中心に広がる自然や風景が大好きだった。「学校帰りに田んぼ横の土手に座って、森を眺めながら一人弁当を食べる子どもでした」家の屋根によじ登り、田んぼの先に広がる満天の星を眺めていました

現在、一八畝で米とビール麦をほぼ一人で生産する智子さん。作業に追われる忙しい中でも、田んぼの美しさに思わず見られることがしばしばだ。「子どもから『ご飯作って』と電話がきて、急いで家に戻ることもあるぐらいです(笑)」

田んぼで米作りをする父、増光彦さんが大好きだった。黙々と一人で作業をこなしていくタイプであり、「おいしい米を作ろうと頑張る父の姿は格好よかった」。四人姉妹の長女である智子さんが「父の跡を継ごう」と思ったのはごく自然の流れだったのだろう。

智子さんは学校を出て即就農するという道を選ばず、「もう一つのやりたいこと」だった養護教諭となった。いわゆる保健室の先生だ。「心理学に興味がある」という智子さん。心の持ち方により体調に影響が出やすい子どもたちの良き相談相手となった。結婚と同時に仕事を離れ、転勤の多い夫裕次さん(四七歳)と共に埼玉県や静岡県へ

と住み移り、三人の子どもに恵まれた。そんな智子さんが就農しようと大田原市に戻ったのは二〇〇七年のことだ。父の病気が分かり、元気なうちに教えてもらおうと決意した。結婚を決める際、夫には「いずれは家の農業をやるから」と伝え、了解は得ていた。勤め先がある静岡県に夫を残し、子どもたちを連れて実家に戻った。

一八畝の水田で米、ビール麦を作る両親の手伝いから始まった。「父とはしょっちゅうもめました(笑)。お互いに遠慮がないから」。全ての作業を体で覚えてきた父は「目で覚える」「(トラクターの)音で感じろ」と熱心に智子さんに教えた。その通りにトラクターを動かしてみると「遅い。代われ」と交替させられた。「父には『教える気はあるの?』と言っていたものです。でも今になれば分かる。適期に作業を終えることがどれほど重要なことか。天候との勝負ですから」

女性一人で米が作れる理由

父と娘の米作りは七年間続いた。父が亡くなり、後を追うように母を亡くした智子さんは、全作業を一人で担うようになった。「自信はゼロでしたが、一心にやるしかない」という心境でした

そんな智子さんを支える人たちが地域にはたくさんいた。一人で奮闘する智子さんのことを知った近所の人たちは率先して手伝ってくれた。

智子さん自身も、忙しい春作業をこなす

ため、シルバー人材やママ友たちに頼み、ハウスでの苗の水まきなどを手伝ってもらった。夜、へとへとになって家に戻ると、「忙しくて作れないだろうから」と近所の人がおかずを届けてくれた。野菜を作っていない智子さんのために、多めに作付けし、「この一畝分は、あんたが自由に取って食べて」と



夫の裕次さん、長女の桃さん次男の駿さんと。長男の裕登さんは農業を継ぐため、東京農業大学で勉強中。momofarmは桃さんの名前にちなみ、裕登さんが命名した

言ってくれた農家さんもある。

こうした人たちの支えに背中を押され、智子さんは踏ん張った。「米作りはいろんな作業があり、人の手も多く必要。それだけに日本人は互いに助け合い、時に譲り合ってきた。そういう伝統が田んぼを中心に育まれてきたからこそ、私一人でも米作りがで

きるのだと思っています」

田んぼには可能性しかない

智子さんには頼もしい相棒がいる。大田原市内で洋菓子店「k a b a c o」を経営する妹の福田優子さん（三六歳）だ。智子さんが作り、精米・製粉した米粉がパティシエの優子さんの手により、すてきな焼き菓子となる。土・日限定で提供する米粉クレープも人気だ。「クレープにするとモチモチで、焼き菓子里にするホロホロとする。小麦粉では出せない食感が楽しめる」と優子さん。二人でアイデアを出し合い商品を開発してきた。製造・販売の連携プレーも見事で、JR東日本のイベント列車のノベルティー商品として、お菓子の詰め合わせ四〇〇個を智子さんが受注し、優子さんが徹夜で仕上げた。

「私はもっぱら工房にこもって作業するタイプで、姉はどんな外に広がっていく。どこにいるのか分からないほど活動的」と優子さんが言う通り、智子さんは農閑期になると米の営業に力を入れ、今では消費者やホテルへの直売、米穀店との取引、業者との契約栽培など多様な販売先を確保している。一方、米の消費減少傾向には歯止めがかけられない難しさも痛感している。消費量の減少はイコール価格の下落につながる。それでも、日本人の国民性をつくってきた田んぼを守っていくしかないと思っ「田んぼを出し、実行に移している。

その一つがグリーンツーリズム（GT）だ。自宅を農家民宿として整え、大学生や外国人の受け入れを始めた。また、大田原市内でGTに関するビジネスをする人と連携し、各種体験プログラムを企画、運営し始めた。温めている企画の一つが農家の蔵を使ったツーリズムだ。智子さんの家にも蔵があるが、食器や荷物の倉庫となり、有効利用されていない。その蔵をリニューアルし、宿泊施設やレストラン、リーススペースとして再生できないかと考えている。あちこちの蔵で再生が始まれば、同市の新たな観光スポットになる。「ヨーロッパではワイナリーツアーで大勢の人が訪れ、ブドウ農家の収入源になっている。日本では蔵を訪ねるマイ（米）ナリーツアーができるんじゃないかな」と目をキラキラ輝かせ話す。

「ここからの眺めが特に好き」という田んぼに案内してくれた。住宅が少なく、周囲一面平らな田んぼが広がり、どこを向いても星が眺められる場所だ。「物心両面で米から離れがちな日本人の心を少しでも取り戻したい」と話す。そのために田んぼの美しさ、そして田舎の有形無形の財産を活用し、かつては密接だった、人と田んぼの関係を近づけることから始めようとしている。「田んぼは米を作るだけの場所じゃない。私は田んぼには可能性しか感じないんですよね」智子さんに会う人は、田んぼの無限な可能性を感じずにはいられないだろう。

（青山浩子／文 河野千年／撮影）

Forum Essay

フォーラムエッセイ

農業の世界に足を踏み入れたのは、三年ほど前。故郷の岐阜県内の農家さんを取材する番組のレポーターを始めたのがきっかけです。

この仕事をするまでは、農業にはいわゆる三K(きつい・汚い・危険)のイメージがありました。でも、実際に農家さんに伺うと、そんなことはなくて。ドローンで農薬散布されるお米農家さんや、実験段階でしたけど、田んぼの水深調整を自動管理している方がいらっしやったり。それまで私が知らなかっただけで、農業技術はこんなにも進歩しているんだ！と驚きました。今は取材のたびに新しい発見があつて、収録をとっても楽しみにしています。

伺った地域の「地のもの」を食べるのも、楽しみの一つ。自然薯の生産農家さんに取材した時は、いただいたとろろがとってもおいしくて、帰りに道の駅で自然薯を買ってしまいました。

実家のある岐阜の東濃地方は、昔から自然薯を食べる文化が盛んです。私も子どもの頃、祖母によく食べさせてもらった思い出があり、自然薯は大好物！ 実家に戻ると、その日の夕食はもちろんとろろです。自然薯は皮が大切なので、皮がむけないようにタワシで丁寧に軽い力で洗います。その後すり鉢でするのですが、これが本当に大変で！ 父と交代ですつたんですが、思った以上に時間がかかりました。味付けは、東濃地方定番の生卵とおだし。とろろをたっぷりとはんにかけてさつといただくのが、本当に最高です。仕事柄、食べ過ぎには気を付けていますが、大好きなものはついついお代わりしてしまいます。

とろろを食べていると、祖母との思い出がよみがえると同時に、苦勞して鉢ですつて食卓に出してくれていたんだなと、改めて感謝の気持ちが高まってきました。

今まで仕事に夢中で、地元を振り返る機会はあまりありませんでした。そんな私が毎回新しい発見をして、また懐かしい記憶を思い出せるのは、取材で伺った農家さんのおかげです。これからも微力ながら農業界を応援していきますので、農家の皆さんも一緒に盛り上げていきましょう。

ちなみに、次回のロケで伺う農家さんはあなたかも！



タレント
鈴木 ちなみ

すずき ちなみ
1989年岐阜県生まれ。飛騨・美濃観光大使。岐阜県JA制作の農業応援番組「鈴木ちなみの元気のみなもと「ちなみな」(岐阜放送)にレギュラー出演中。その他「テルサタ」(名古屋放送)、「スタイルプラス」(東海テレビ)、「どーも、NHK」(NHK)、「ふらっとあの街 旅ラン10キロ」(NHK-BS)やCMなど、幅広く活躍中。

とろろは家族の味

NPO法人グリーンウッド 自然体験教育センター代表理事 辻英之



● つじひでゆき
一九七〇年福井県生まれ。人口一六〇〇人の泰阜村に移住して二六年。「何も無い村」における「教育」の産業化に成功した。NPO法人グリーンウッド自然体験教育センター代表理事、青森大学客員教授、立教大学・桜美林大学非常勤講師など全国を飛び回る他、「泰阜村総合戦略推進官」として「教育立村」の実現に向けて奔走する日々である。著書に「奇跡のむらの物語 一〇〇人の子ともが限界集落を救う！」（農文協）。

近

年、「学力の低下」が叫ばれている。国際学力テストの点数の低さが、国力や経済的競争力の危機を憂える議論と結び付けられて、教育の危機を表す指標としてしばしば用いられている。学力論はこれまでさまざまに議論されてきたが、そもそも「学力」はまだ定義されていない。それにもかかわらず、学力テストなど数値化しやすい評価指標だけに論じられていること、そしてそもそも誰のための「学力」か、という視点が欠けたまま議論が展開されていることに大きな疑問を抱く。

学力テストや難関高校・大学合格者数、分数の計算や漢字の書き取りなどのように数量化できるような従来の「学力」は、「個人が所有する学力」と言える。それは、自立して生き、生活を支え、社会を発展させる原動力であることは間違いない。しかし、一生懸命獲得した知識や技能が、他人を蹴落として自分の受験合格や出世のために使われていく場合が圧倒的に多い。どれだけ「個人所有の学力」が高くて、その学力

が人を騙したり人を傷つけたり、世の中を壊すために使われるなら意味がない。そこには、所有した知識や技能を他人のためや社会にどのように活かすのかという視点が欠けている。

長野県下伊那郡泰阜村（やすおかむら）という人口一六〇〇人の小さな山村に、暮らしの学校「いだらぼっち」という山村留学がある。全国から集う子ども（二〇人ほど）が、里山の一年間の共同生活を営みつつ村の小・中学校へと通う。子どもが食事や風呂たき、掃除、洗濯など、暮らしの一切を手掛けていく。「困ったときはお互いさま。みんなで解決する」という村の「寄り合い」の風習を、そのまま活かした子ども主導の暮らし。ストーブや風呂の燃料は全て村の里山から間伐した薪。田んぼや畑でお米や野菜を育てて基本的な食材は確保し、敷地内の手作りの登り窯で焼いた食器でご飯を食べる。暮らしのあらゆる部分に、村の地域力や森・里山の教育力を活かすことを三〇年間揺るぎなく続けてきた。

里山の一年間の暮らしを通して、次のような「学力」が培われる。四月にはお風呂のたき口で何もできなかつた子どもが、秋には自分が入った後にお風呂に入る人のために薪をくべる(追いだき)ことができようになる。ここで培われた「学力」は、単にお風呂焚き(燃焼)の習熟度が増しただけではなく、他の人を思いやる気持ちを伴う「学力」だ。

来年度参加する子どものために、今年度参加している子どもが森に入る。彼らは、来年の暮らしに必要な薪を、里山から運び出して割つてためる。ここで培われた「学力」も、問伐による環境保全の知識と技術だけではなく、仲間のためを想う長期的な視点を伴った「学力」だ。

テ

ストの点数や有名大学の合格者数で評価されるのが、今の日本の当たり前前の学力観だ。

人より一点でも高い点を取る、人を押しつけて合格する、そのようなことが当たり前の中で培われた学力は、果たして本質的なものなのか。政府の公文書改ざんや企業の粉飾決算、大学不適切入試などの不正が次々と明るみに出た。それらの当事者たちは、「個人が所有する学力」の視点からいえば確かに「高学

力」の人たちだ。しかし「他者との関係を豊かにする学力」の視点からいえば明らかに「低学力」だ。もはや現在の教育の競争システムは「個人が所有する学力」を高める動機付けはできても、他者の役に立つようないわば「他者との関係を豊かにする学力」を育てることはできていないのである。

今後ますますグローバル化する時代で生き抜くために必要なチカラは「英語などの語学力」であることは間違いない。しかし今、それに匹敵するチカラが必要になってきているように思えてならない。それが「他者との関係を豊かにする学力」だと確信している。

森や里山で展開される教育実践は、一見すると地味である。しかし「個人所有の学力」の視点からいえば「低学力」かもしれないが、「他者との関係を豊かにする学力」の視点からいえば「高学力」の子どもを育て続けてきた。これからの未来を生きる子ども、そしてグローバル社会を生きる子どもには、前者の学力はもちろん、後者の学力をしっかりと培わせるべきだ。森や里山に、もつともつと子どもたちを誘おうではないか。そこはまさに、本質的な学力を育てることができるといえる最前線なのだから。

F

他者との関係を豊かにするチカラ 森や里山にもつと子どもを誘おう

施肥量激減の技術

日本政策金融公庫
テクニカルアドバイザー

吉岡 宏

キ ヤベツやハクサイなどの露地野菜の栽培では、畑に施肥された肥料(窒素)の三〇〜四〇%が作物に吸収され、残りは土壌から流亡したり、ガス化して放出されたり、作物に吸収されずに土壌に残っています。

畑に施肥した肥料の作物に吸収される割合(利用効率)が悪いと、肥料が無駄になるばかりでなく、流亡した肥料成分によって地下水が汚染されるなど環境にも悪い影響を及ぼすこととなります。肥料の利用効率を高めるために、肥料成分の溶出

を調節した肥効調節型肥料など新しい機能を備えた肥料や土壌診断に基づき作物の養分吸収特性に合わせたり、肥料の施肥位置を変える施用法など多くの技術が開発されています。特に、肥料の施肥位置などを変えて、肥料の施肥位置などを変えて



畝内部分施用機と肥料混合状況(写真提供:屋代幹雄氏)

する肥料を二〇〜三〇%、「畝内部分施用」では三〇〜五〇%減らすことができ、さらに二つの施用は雑草の生育を抑え作物の生育をそらせる効果もある、と試験結果により明らかにされています。

「畝内部分施用」技術は、「畝内局所施用」の問題点であった定植苗の初期生育の遅れや施肥位置が定植苗の根の近くになった場合に起こる肥料焼け(多量の肥料成分により根の機能の低下が起こる現象)の防止策を考えていた東北農業研究センターの屋代幹雄さんたちによって開発されました。

二〇〇三年に「畝内带状攪拌施用機」として特許出願され、〇六年に登録。そして、〇八年に井関農機株式会社から「畝内部分施用機」として市販されています。

る施用法について見てみましょう。露地野菜の元肥(種まきや定植前に施用する肥料)の施肥方法には、大別すると三つの方法があります。畑全面に施肥し、耕うん・畝立てを行う「全面全層施用」、畝立てを行いながら畝の中に棒

状または带状に施肥する「畝内局所施用」、畝の中央部分に施肥し部分的に攪拌しつつ畝立てする「畝内部分施用」です。

作物の生育や収量が同じであっても、「全面全層施用」に比べて、「畝内局所施用」では施肥

す。耕うん軸に一对のディスクを取り付けて肥料の混合範囲を限定できるのが特徴です。ディスク間に施用された肥料は、このディスクの幅だけに带状に土壌と混合され、その後畝立てされます。

「畝内部分施用」は、大規模産地を中心に進められており、全国的に見ると普及率は高くありません。しかし、肥料費低減や環境への影響の軽減の観点から、今後一層重要になると思われます。

F



Profile

よしおか ひろし
1948年京都府生まれ。弘前大学大学院農学研究科(修士課程)修了後、農林省野菜試験場入省。農林水産技術会議事務局研究調査官、(独)農研機構野菜茶業研究所所長、(社)日本施設園芸協会常務理事などを経て、2012年10月から現職。専門は野菜の栽培生理。農学博士、技術士(農業部門)。



移住者だから分かる島の魅力発信 暮らしと観光客をつなぎ活性化へ

兵庫県姫路市家島町

いえしまコンシェルジュ合同会社

中西 和也



ただの観光ガイドにあらず

私たち、いえしまコンシェルジュは「家島の暮らしと観光客をつなぐ案内人」です。活動目的は、観光客に家島の魅力を知ってもらい、島のファンを増やし、島を活性化させること。

そのため私たちは、単に島を案内するだけでなく、地域の人たちとの交流や島暮らしの体験をつなぐプロジェクトを展開しており、現在は年間約二五〇〇人の来訪者を受け入れています。家島は兵庫県南西部、瀬戸内海播磨灘に浮かぶ、四〇余の家島諸島の中部に位置する離島です。離島とはいえ諸島の中では面積が大きく、姫路市とは約三〇分で往来可能で、絶海の孤島ではありません。

実は家島にはこれといった観光名所はないのです。しかし、瀬戸内海を背景にした豊かな自然風景や街並み、新鮮な魚介類、また住民の人たちはとても魅力的です。例えば港の船の眺め。大き

な船が石を積んで停留していますが、家島の基幹産業には採石と海運があります。採石は、隣の男鹿島・西島でなされ家島から全国へ送られるので、石積み的大型船がいるのです。

また、現在の住民数は二八〇〇人ほどですが、高度成長期には七〇〇〇人に上りました。その名残で、今も四階建て、五階建ての個人宅が所狭しと建ち並んでいるのです。エレベーター付きの家もあります。

ところが、島には大手チェーンのスーパーは皆無で、買い物は昔ながらの商店街が中心です。島の人たちはお店の人と顔見知りで、会話の面白い物はありません。島の魚はともおいしく、魚屋さんには水槽があつて、活魚で販売しているのも特徴の一つです。

島の日常は都会の非日常

そこで、いえしまコンシェルジュは「島の日常は、都会の非日常」とうたい、観光からさらに一

歩入った島暮らしの魅力を、その背景を含めてガイドしているんです。一番人気のツアーは三時間ほどの「おさんぽ+島ごはん」。観光客にまず島の特徴などを話しながら、一緒にゆっくりと散歩します。その後、提携の食事処で「メたてびちびちの魚」を堪能してもらいます。散歩では必ず商店街に行き、島の人たちとの会話を楽しみます。家島には人懐っこい人が多く、初対面でも「どっから来たの？」など話し掛けてきます。その会話が、都会暮らしでは得られない楽しい非日常体験となります。

魚屋さんでは、水槽からタコ、イカなどを引き上げ、直接触れてもらいます。都会の日常でこんなシーンはありませんよね。

一番多いお客さんの感想は、「いつの間にか島の一員になったみたい！」という声です。徐々に口コミで「家島では都会の非日常がたっぷり味わえる」と広がり、個人客の増加とともに旅行会社からも依頼が入るようになりました。

profile

中西 和也 なかにし かずや

1985年大阪市生まれ。2級建築士。2009年、NPOいえしまが主催した「いえしまゲストハウスプロジェクト」で初めて家島を知り、島の魅力に衝撃を受ける。11年3月家島にリュック一つで移住。12年4月より、島の観光案内人「いえしまコンシェルジュ」として、家島の暮らしの魅力を紹介するガイドを実施。人口減少社会における暮らしや働き方について、人生を通し社会実験中。

いえしまコンシェルジュ合同会社

2014年4月、法人化。1年間に2500人を案内する家島唯一のガイド事業者。特産品の企画販売、島外飲食店への島内特産品の卸売りや島内外の若者と島の暮らしの魅力を伝える「家島ふるさとづくり青年隊」活動や、譲り受けた民宿を改修した「男鹿島うみのいえ」の運営、島内カフェを拠点として「小商い」を実践する「週末島活」の運営を行っている。

ガイド以外には、島外の人を巻き込んださまざまな取り組みも展開しています。二〇一四年から始まった、島内外の若者一〇人と島の未来について話し合い行動する「家島ふるさとづくり青年隊」事業では、島外のメンバー五人に月一回来島してもらいます。島のお土産が少ないという課題を見つけ、手ぬぐいなど商品を開発しました。兵庫県の補助金は二年間でしたが持続させるように工夫し、五年目となった現在では補助金なしで活動を続けています。ようやく組織が成熟し、地域への働き掛けや協力者が増え、できたことに充実感を非常に覚えています。

家島の人たちのいえしまコンシェルジュへの共感も強まってきたことで、一五年には、海の前々の民宿を一軒譲り受けることができました。



上)「おさんぽ」ツアーでの1コマ。活きたタコに子どもたちはびっくり
下)「週末島活」で奈良のソムリエによるワインおひろめ会

課題先進地でまちづくりに挑戦

大阪の建築士仲間や学生たちと一緒に、一年間かけて改修しました。具体的には一泊二日のワークショップを五回実施し、延べ二〇〇人が参加してくれました。現在は「男鹿島うみのいえ」として、神戸や大阪にいるメンバーたちと共同で運営しています。

私はもともと大阪で生まれ育ち、大学では建築を学びました。当時は名建築といわれるものを見て回るのが好きで、建築を非常に崇高なものとして捉えていました。ところが就職を考え始めたとき、地元の駅前には新たなマンションが乱雑に立ち並ぶのを見て、描いていた建築の理想の在り方と現実に大きなギャップを感じました。また同時

に、働くならば一企業の歯車ではなく、自分が「社会」にとつて必要だと考えるものに携わりたいと考えました。そして次第に、建築の周りにある「まち」「まちづくり」に興味が移っていきました。

しかし、想いはあるものの行動を起こせなかった私は、卒業後アルバイトやニートをして悶々としていました。そんなある日、知人から家島のゲストハウスプロジェクトについて聞きました。

それは、増加する家島の空き家をゲストハウスとして活用し、姫路城を訪れる観光客を誘致しようという趣旨で、島の主婦たちがつくるNPO法人いえしまが実施するプロジェクトでした。ゲストハウスだけでは観光客を誘致できないので、総合的な観光のコーディネーター「いえしまコンシェルジュ」を併せて養成するというのです。

興味を持った私は二〇〇九年、二六歳のときに初めて家島を訪れました。島に足を踏み入れると、先ほどご紹介した島の風景に驚きました。その背景はどれも他の島にはないもので、そこにとっても魅力を感じたのです。

離島や中山間地域こそ、今後の日本の課題の先進地です。私は、家島で「まちづくり」に取り組み、過疎化する島の課題解決にチャレンジすることを決めました。そして約二年間、家島で活動した後、一年に移住したんです。

住民からの思わぬ大反対

しかし、NPO法人いえしまのおばちゃんたちは、「やめとき！ 大学も出たのに、こんな島に来てもいいことないで。親の気持ちを考えたら受け入れられへんわ」と大反対。

おばちゃんたちは、観光の担い手育成を企画したものの、実際に移住者が現れるとは想像していなかったのです。しかし、私自身はすでに仕事を辞め、退路を断たれています。引き下がるわけにはいきません。

押し問答の末、ようやく条件付きで受け入れられました。「島でまちづくりをやりたい気持ちは分かるけど、今すぐにどうこうできるわけじゃない。生きるためにはお金が必要やし、アルバイトを紹介したるから、とりあえずはそこで働き」と言われるがまま、島の漁師民宿で働くことになったのです。結果としては、民宿での体験は非常に貴重で、初めて漁に出たり、魚のうろこも取れなかったのが三枚おろしまでできるようになりました。貯金ができるほどでしたが、島に

来たのはまちづくり、地域おこしのため。私は家島でガイドツアーの企画をすることにしました。

内容は島案内と、島の魚屋で魚を買って刺身にして食べるという、今の「おさんぽ+島ごはん」の原型です。しかし、これには旅館や飲食店の協力が必須です。私は実績もない若い移住者ですから、どの店も話を聞いてくれませんでした。

困りはててNPO法人いえしまのおばちゃんたちに相談に行き、お店を一軒紹介してもらいました。もはや、観光客の紹介手数料の交渉ができる状況ではなく、企画を成立させるためにお店に懇願する立場です。なんとかお店の承諾を得ることができ、何度かモニターツアーを実施した後、ツアーを商品化することができました。そして、コンシェルジュとのウェブサイトをづくり、SNSで情報発信。少しずつお客さんが増え、一年後には新聞やテレビにも取り上げられました。

これらの活動を見て島の人たちは私と、私の仕事を認知し始めてくれました。また、漁師民宿での働きぶりや、大阪から来た彼女と島で結婚式を挙げたことも、私が本格的に定住するのだなど、島の人の好印象につながったようです。まちづくりは自分の想いだけではなく、一つ一つの行動とコミュニケーションの積み重ねなのだ、とつくづく感じています。

移住者増より今の島暮らしの充実

私はいえしまコンシェルジュの事業を始めたとき、人口減少が続く島の将来を案じ、最終目標として「移住者の増加」を考えていました。

しかし現実には厳しく、移住者はなかなか現れられませんでした。一方、観光や旅行の中継地として、また家島と一緒に盛り上げようと定期的に来島してくれる仲間が増えています。

そこで、思い切つて私は考えを変えようことにしました。「移住させる」ことを目指すのではなく、まずは島の人たちが今の暮らしを続けて、島の暮らしをより豊かにすること。来島者たちにはその暮らしに参加してもらう。島での滞在時間は短くてもいい、来島者と島の人たちの出会いをプロデュースするのです。

そこで今、最も力を入れているのは「週末島活」という取り組みです。これは島のカフェを拠点として島外の参画者を呼び、島にはない小商いをしてもらおうのです。島人は、普段食べられないものや受けられないサービスが体験できる。観光客には、その日限りの特別な観光の魅力となる。参画者には、スキルアップやスモールチャレンジができる。三方良しの企画です。

二〇一八年一月に拠点のカフェができた時には、奈良県のソムリエがワインを選び、大阪府のデザイナーがラベルをデザインした「家島の魚にあうワイン」、姫路市の粘土細作家による魚をモチーフにした作品、大阪在住の作家による手作りアクセサリーなどを並べました。さらに、趣味の燻製でイベント企画が持ち込まれたり、多様な方から興味が寄せられています。

私は今、島の人たちやガイドツアーのお客さんから「すごくいい顔してるね」と言われることが多いんです。これからも、家島にしかない島の暮らしの魅力を高めていきたいと考えています。

『循環型経済』をつくる

図解でわかる田園回帰1%戦略

藤山浩 編著 有田昭一郎 豊田知世 小菅良豪 重藤さむ子 著



(農山漁村文化協会・2,600円 税抜)

地域活性化策の具体的シナリオ

村田泰夫

(ジャーナリスト)

地域をどうしたら元気づけられるのか。全国の市町村、特に過疎化に悩む中山間地域の首長さんたちが思い悩んでいることだ。有力な解決策が、この本に盛り込まれている。

過疎地域に共通した嘆きは「地域には仕事がない」ことである。住民たちに、必要なだけの収入が得られる仕事があり、健康で文化的な生活ができなければ、地域社会は成り立たない。

何とかしたいと、自治体はもがいてきた。地域に働く場をつくるため、工場を誘致しよう。他の地域から若者を呼び込むこともできる。しかし、経済のグローバル化で、誘致した工場は中国など海外に出て行ってしまった。ならば、高速道路や新幹線など公共事業を呼び込もう。だが、一時的な効果しかなかった。

働く場をつくって、地域に人々が定住できる

条件を整える。そうすれば、人々は買い物をし、地域の経済活動が活発化するという考え方に間違いはなかった。問題は、企業誘致など外部に頼ることにある。持続性をもたせるには、自ら雇用の場を創出しなければならない。

それを内発的發展と呼ぶが、その方法が「循環型経済」をつくることなのである。外部から資金を呼び込んで雇用の場をつくることを考えるのではなく、自分たちのお金が外部に流出する金額を少なくして、地域でお金が循環するように、お金の使い方を見直せばいいのだ。

編著者の藤山さんは、かねてから「田園回帰1%戦略」を唱えている。過疎化の進行を防ぐには、地域の人口の1%に当たる定住者を増やせばよいそうだ。定住家族を養えるだけの収入が必要となるが、地域において1%の資金流出を防げば雇用の場ができるという。

資金流出を止めるカギは、食料やエネルギー分野にある。例えば、都会の工場で作られた食品を買うのをやめて地産地消に徹する。暖房は灯油から地元産の薪に変える。もともと農山村には食料とエネルギーを自給できる力があつただから、できないことではない。

藤山さんは鳥根県中山間地域研究センターの研究統括監をしていたが、昨年「持続可能な地域社会総合研究所」を立ち上げた、地域再生のエキスパートである。本書は図表が多く事例も豊富で分かりやすい。自治体の地域づくり担当者に勧めたい一冊である。

読まれています 三省堂書店農林水産省売店 (2018年12月1日~12月31日・税抜)

タイトル	著者	出版社	定価
1 サカナとヤクザ 暴力団の巨大資金源「密漁ビジネス」を追う	鈴木 智彦 / 著	小学館	¥1,600
2 農業崩壊 誰が日本の食を救うのか	吉田 忠則 / 著	日経BP社	¥1,800
3 スマート農業のすすめ 次世代農業人【スマートファーマー】の心得	渡邊 智之 / 著、 産業開発機構 / 編	産業開発機構	¥1,800
4 スマート農業パイブル Part II 「データドリブン」で日本の農業を魅力あるものに		産業開発機構	¥2,500
5 IoT・自動化で進む 農業技術イノベーション	(一財)社会開発研究センター / 編	日刊工業新聞社	¥2,000
6 ビレッジプライド 「0円起業」の町をつくった公務員の物語	寺本 英仁 / 著	ブックマン社	¥1,600
7 保持林業 木を伐りながら生き物を守る	柿澤 宏昭、山浦 悠一、 栗山 浩一 / 編	築地書館	¥2,700
8 「複合林産型」で創る国産材ビジネスの新潮流 川上・川下の新たな連携システムとは	遠藤 日雄 / 著	全国林業改良普及協会	¥3,000
9 食料・農業・農村白書(平成30年版)	農林水産省 / 編	日経印刷	¥2,600
10 土・牛・微生物 文明の衰退を食い止める土の話	デイビッド・モントゴメリー / 著	築地書館	¥2,700

Vietnam Food Expo 現地レポート

魅力的な市場に国際競争激化の予兆

ベトナムは、輸出先として大きな可能性がある市場と考えられます。

ジェトロ公表のベトナム一般概況(二〇一七年)によれば、ベトナムの人口は、約九五〇〇万人(世界人口ランキング一五位)、経済成長率は六・八%と高く、消費市場は活況を呈しています。

そこで、ベトナムへの輸出の実状を探ろうと二〇一八年一月一四〜一七日、ベトナムホーチミン市のサイゴン・エキシビション&コンベンションセンターにて開催されたベ



日本ブースはバイヤーで盛況



南国らしいフルーツが並び現地出展者ブース

トナム国内最大級の見本市である「Vietnam Food Expo」^{ベトナムフードエキスポ}を視察しました。

今年で四回目を迎えたベトナムExpoには、世界二四カ国から約四五〇の企業・団体が出展し、約二万七〇〇〇人が来場しました。会場は、野菜、水産物、飲料、茶・コーヒー、食品原料、加工食品の六つのカテゴリーに分けられ、さらに国外出展者のエリアが設けられていました。出展者は、農産物を前面に押し出した陳列やその場で調

理をした試食を提供するなど、工夫を凝らしていました。

また、国外出展者は、会場内に大きな国旗を掲げPRしており、大々的に輸出に取り組んでいる様子が見えられました。

日本からは、五つの企業・団体が出展しました。約三〇の商品を出展、出展品目は牛肉(黒毛和牛)・日本酒・お茶・ブリのフィールなど多岐にわたっていました。

開催初日、私は開場と同時に日本ブースに足を運びました。日本ブースはすぐに多くのバイヤーなど来場者でにぎわい、ベトナムでの日本食・日本食材への関心の高さがうかがえました。

出展者の方々は来場者に対し、現地の通訳を介して、商品の説明を行い、また味など評価を丁寧にヒアリングし現地のニーズを熱心に探っていました。

すでに輸出をしている出展者に輸出時の課題を聞いたところ、「ベトナム政府の輸出手続きに時間がかかり、輸出できるようになるま

で一年半近くかかった」「商談が成立したが、実際の物流上で問題が判明し、破談になった」という話もありました。

ベトナムExpoの主催者側に日本食材の評判を聞くと、ベトナムは近年オーガニックブームが起きているなど食に対する安心・安全への意識が高まっており、日本食材は高く評価されているそうです。一方、物価水準を考えると日本食材は高価とのイメージがベトナム人にはあるとのことでした。

視察を通じて、ベトナムは輸出先として魅力的な市場であるものの、他国との競争が激しくなっていることを実感しました。

日本の農水産物は日本ブランドを押し出した高付加価値商品として認知されており、一定のニーズが見込まれます。煩雑な輸出手続きやベトナム国内のコールドチェーンの整備不足、さらに価格の問題などがベトナムへの輸出にあたっての課題と思われます。

(情報企画部 柴崎 勇太)

推進大会

山口県産品の商談会で地域の連携深める

やまぐち六次産業化・農商工連携推進協議会主催（公庫共催）の「推進大会」を開催。

大会では、出展者がこだわりの六次産業化の商品などを三五ブースでバイヤーに売り込み、試食提供や販売も行い盛況な商談会となりました。

また、山口県の村岡嗣政知事も来場し「商品開発や地域連携につながる大会となることを期待します」とあいさつ。全ブースを回りながら出展者と交流を図っていました。一月一日、於：山口市、参加者：六次産業化の認定事業者や関係機関など二三四人（山口支店）



多くの来場者で会場は盛況でした

林業の会

地域が抱える課題の答えは現場にあり

今年度の「公庫林業資金友の会」を開催。会設立三〇年を迎え、フリーキャスターの伊藤聡子氏が「地域経済自立・発展に必要なビジネスの視点」、林業経営コンサルタントの坪野克彦氏が「わが国林業のあるべき姿」をテーマに講演。地域の課題解決の答えは現場（地域）にあることや、日本林業の展望に関する提言などの充実した内容に、参加者からは「地域活性化、林業の課題について再認識できた」といった感想が寄せられました。

一月三〇日、於：京都市、参加者：近畿地区の公庫お客さまなど三八人（京都支店）



質疑応答では多くの質問が寄せられました

● 交叉点 ●

APRACA・研修団受け入れと理事会開催

日本公庫農林水産事業では毎年、

アジア太平洋農村・農業金融協会（APRACA）※の加盟機関に対し、日本の先進農業者の視察などの研修機会を提供しています。今回は一月二二～二六日に、ネパール、パキスタン、スリランカ、カンボジア、マレーシア、インド、フィリピンの農業金融関係者一五人の研修生を受け入れました。

研修生は都内で日本農業や農業金融について学んだ上で各国の現状や課題について意見交換を実施。その後、先進的な農業の現場を視察するため関東近郊で現場視察を

実施しました。

まず、千葉大学において植物工場を視察し、最先端の農業技術について学びました。埼玉県では先進的な施設園芸や六次産業化、農業体験など多くの取り組みを実践する農業者を訪問。地元JAにも足を運び、日本の最先端の農業現場や農業金融に対する理解を深めました。

研修生からは「とても興味深い研修だった」「日本農業に対する理解が深まった」などの声が聞かれ、有意義な研修となりました。

また、一月八～一〇日の三日間、スリランカのコロナボでAPRACAの第二回総会および第七〇回理事会が行われました。今後五年の活動計画、APRACAメンバーの拡大、アジア太平洋地域の農村・農業金融制度の改善のため協力関係の強化の方向性が話し合われ、第七一回理事会の東京開催が確認されました。（情報企画部）

※アジア太平洋地域の農村・農業金融制度の改善を図るため、情報交換や研究・教育など交流事業を行う機関です。日本では日本公庫が唯一の加盟機関となっています。



今年は七カ国の研修生が参加。多彩な顔触れとなりました

みんなの広場

◆私は二〇歳代ですが、昨年二月から農業経営を開始しました。『AFCフォーラム』を読み、経営の多角化の進展や規模の拡大、農業従事者の能力の向上が著しいと感じました。

私も、自らのできることを模索し、それを実現させて経営を発展させていくことが急務だと考えさせられました。どのような農作物やサービスを提供していけばいいのか。自社がどのように社会に貢献していけるのか。たくさん悩みながら経営をしていきます。

(群馬県渋川市 須田 勇輝)

◆二月号の「変革は人にあり」で紹介されているのは「おいしい福祉給食を届ける先駆者になる」と意気込み「楽食」に積極的に取り組んでいる藤岡和子さんだ。時代の流れを先取りしている点が素晴らしいと感じた。

私自身、そろそろ高齢者施設への入居を考えている。たまたま近所の施設に体験入居する機会があった。生活そのものは快適であつても、正直に言えば、出される食事があまりおいしくなかった。これではちよつと寂しいと思った。もう少し、食生活に工夫があつてしかるべきと考えている。

藤岡さんの「楽食」が当たり前と

なり、高齢者施設での食生活が楽しいものになることを期待したい。

(広島市 内例)

みんなの広場へのご意見募集

本誌への感想や農林漁業の発展に向けたご意見などを同封の読者アンケートにてお寄せください。「みんなの広場」に掲載します。二〇〇字程度ですが、誌面の都合上、編集させていただきます。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記してください。掲載者には薄謝を進呈いたします。

「郵送およびFAX先」

〒100-0004

東京都千代田区大手町一丁目九一四

大手町フィナンシャルシティノースタワー

日本政策金融公庫

農林水産事業本部

AFCフォーラム編集部

FAX 〇三三三七〇一三五〇

メール配信サービスのご案内

日本公庫農林水産事業本部では、メール配信による農業・食料産業に関する情報の提供をしています。メール配信を希望される方は、日本公庫のホームページ(https://www.jfc.go.jp/service/mail_nourin.html)にアクセスして登録ください。

(情報企画部)

編集後記

④山間部で生まれ育った私ですが、恥ずかしながら、今回の特集取材で初めて林業の生産現場を視察しました。迫力ある立木の伐倒に魅せられるとともに、一連の作業工程が徹底して効率化していることを知り、林業経営の明るい未来を垣間見た気がしました。新たな森林管理が私たちに一層の恵みをもたらしてくれることを期待します。(西山)

④ベトナム消費市場の魅力をお伝えしていますが、実際にベトナムの町の中を歩くと、誌面ではお伝えできないほど活気が感じられます。至るところに高層ビルが建設され、バイクがあふれる。以前テレビで見た高度経済成長期の日本のようでした。制度面などの課題がまだまだ多いようですが、皆さま、輸出の検討は、価値あります。(柴崎)

④「まちづくりむらづくり」の舞台の家島では、「魚屋さんで活魚を購入」が普通というからびっくり。魚の新鮮さを例え「島の猫は死んだ魚はまたいで通る」と中西さんから聞いたときは、光景を想像して思わず笑ってしまいました。今の時期、魚屋さんの水槽では、舌平目、メバル、イカ、サバなどが生き生きとしているそうですよ。(城間)

④秋に国産ヒノキの元禄割り箸を購入。正月の祝箸に使ったら、家族は香りに感動していました。林野庁によると、二〇一〇年に国内で消費された割り箸のうち、九七％は中国産を主とする輸入品だそう。自分ができることから国産材を応援したいです。ちなみに購入価格は二〇膳で六〇〇円。これは高いと感じますか？(前島)

AFCフォーラム Forum

- 編集

元 鳴谷 元	西山 大也	高雄 和彦
柴崎 勇太	城間 綾子	前島 幸子
鈴木 晃子		
- 編集協力

青木 宏高	牧野 義司
-------	-------
- 発行

(株)日本政策金融公庫 農林水産事業本部
Tel. 03(3270)2268
Fax. 03(3270)2350
E-mail anjoho@jfc.go.jp
ホームページ <https://www.jfc.go.jp/>
- 印刷 凸版印刷株式会社
- 販売

株式会社日本食糧新聞社
〒104-0032 東京都中央区八丁堀2-14-4
ヤブ原ビル
Tel. 03(3537)1311
Fax. 03(3537)1071
ホームページ
<http://info.nissyoku.co.jp/koudoku/>
お問い合わせフォーム
http://info.nissyoku.co.jp/modules/form_mail/
- 定価 514円(税込)
- ④ご意見、ご提案をお待ちしております。
- ④巻末の児童画は全国土地改良事業団体連合会主催の「ふるさとの田んぼと水」子ども絵画展の入賞作品です。

国産にこだわり
農と食を
つなぎます。

第12回 アグリフードEXPO大阪 2019

プロ農業者たちの国産農産物・展示商談会

日時

2月20日(水) / 21日(木)

10:00~17:00

10:00~16:00

主催

日本政策金融公庫

会場

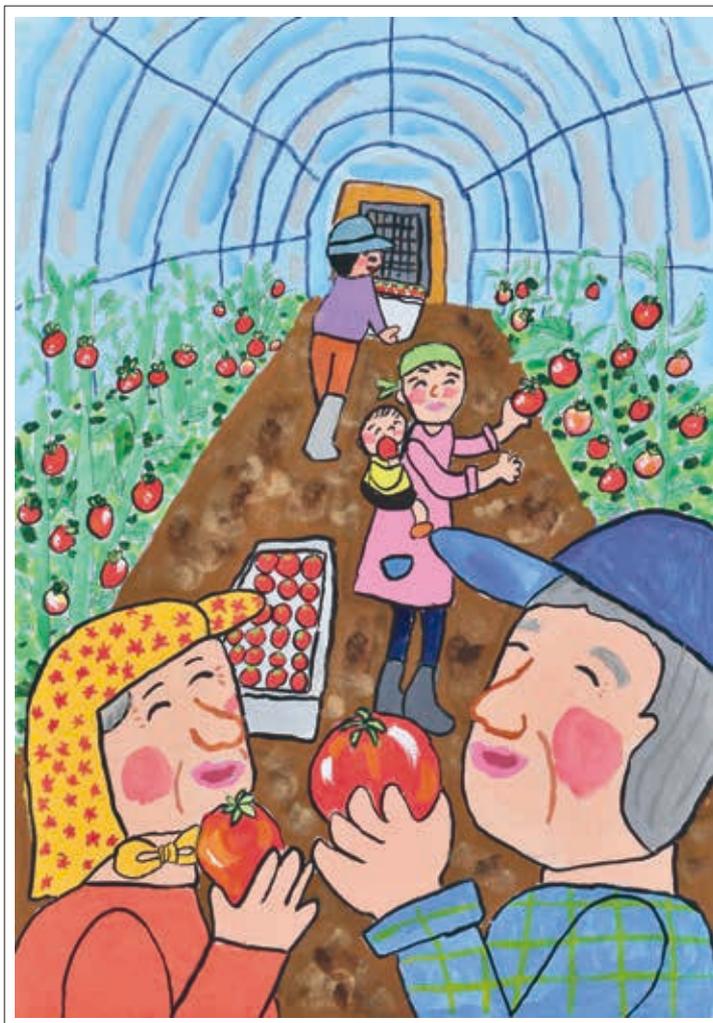
ATC アジア太平洋トレードセンター



Next! 森林経営の将来像

■AFCフォーラム 平成31年2月1日発行(毎月1回1日発行)第66巻11号(822号)
■発行/(株)日本政策金融公庫 農林水産事業本部 〒100-0004 東京都千代田区大手町1-9-4 Tel.03(3270)2268
■販売/株式会社日本食糧新聞社 〒104-0032 東京都中央区人形町2-14-4 7F原ビル Tel.03(3537)1311 ■定価514円

【本体価格476円】



『きれいなお水で育ったトマト』岩本 菜奈 愛知県大府市立共和西小学校

